現職教員と教員志望学生の児童・生徒観 および指導行動に関する研究(10) —改良版児童・生徒観尺度作成の試み—

○藤田 正 (奈良教育大学)
崎濱秀行 (阪南大学)

林 龍平 (関西福祉科学大学)

キーワード: 改良版児童・生徒観尺度, 教員志望学生,
2 因子 (学習指導性; 自律・自己統制性) の抽出

問題と目的

本研究の目的は、崎濱・林・藤田(2016)が作成した児童・生徒観尺度の改良版尺度を作成することである。

崎濱ら(2016)は、現職教員および教員志望学生を対象として、彼らが有する児童・生徒観および彼らが重視する学習指導行動の構造を検討した。その結果、児童・生徒観については「学習指導性」「自律性」「自己統制性」の3因子を、学習指導行動については「学習指導行動」の1因子を抽出した。

崎濱ら(2016)で使用された尺度は4件法であり、すべての項目が「児童・生徒中心的」—「教師中心的」の対構造をなしていた。これにより、回答者個々の児童・生徒観が全体として児童・生徒中心的なのか、それとも教師中心的なのかを明らかにすることが可能であった。しかしながら、実際の児童・生徒観の様相は下位尺度によって異なっていた。たとえば「学習指導性」では回答者全体として児童・生徒中心的な児童・生徒観を重視していたのに対し、「自律性」「自己統制性」では回答者全体として教師中心的な児童・生徒観を重視していたのである。これらの結果は、複数の下位尺度の中で一貫して児童・生徒中心的か教師中心的かといった見方をしているわけではなく、回答者個々の中に児童・生徒中心的な見方と教師中心的な見方が併存していることを示唆しているものと考えられる。このことから、各項目を児童・生徒中心の一教師中心的という対構造にして回答を求めるよりも、対の項目を単一項目化し、その上で、各々の項目をどの程度重視しているかをたずねた方が、回答者の有する児童・生徒観をよりの確に捉えることができるであろう。

そこで本研究では、崎濱ら(2016)における尺度を単一項目の形式に変更し、改めて児童・生徒観の構造を検討することとした。

方 法

調査参加者 近畿地方の大学生118名(男性43名, 女性75名, 平均年齢19.7歳)。

材料 改良版児童・生徒観尺度を用いた。崎濱

ら(2016)を単一項目化したものであり、38項目で構成された。回答者に対しては、各々の項目について、1(まったくあてはまらない)~4(非常によくあてはまる)の4件法で回答するよう求めた。

手続き 本研究はwebを通して行われた。調査実施にあたっては、教育心理学の授業で、調査の目的および調査への回答を呼びかける紙面を配布した。その上で、回答に同意した者だけが回答するよう求めた。

結果と考察

SPSS Ver. 25.0により、得られたデータに関する因子分析(主因子法 Promax 回転)を行った。固有値1以上, 因子負荷量0.35以上, 固有値の減衰率を考慮し, 2因子を抽出した。

第1因子($\alpha=.84$)は「12. 教師の役割は、児童・生徒の自発的な探求を促すことだ。」「14. 児童・生徒が学びに最も意欲的になるのは、問題の解き方を自分で発見できた時だ。」などの13項目が高い負荷量を示した。全体として、学習指導に関する項目で構成されていたことから、第1因子を「学習指導性」因子と命名した。第2因子($\alpha=.82$)は「9. 児童・生徒は、特にしつこく気を配らなくても彼らなりに地域や学校できちんと生活できるものだ。」「1. 児童・生徒は、外からいろいろなはたらきかけをしなくても、学ぼうとはしないものだ。」などの15項目が高い負荷量を示した。全体として、自律・自己統制といった、生徒の人間形成に関わる項目で構成されていたことから、第2因子を「自律・自己統制性」因子と命名した。抽出された2因子とも崎濱ら(2016)に比べて α 係数は上昇した。

崎濱ら(2016)では「学習指導性」「自律性」「自己統制性」の3側面が示された。また、参加者の中には現職教員が含まれていたことも、異なる結果となったのかも知れない。しかしながら、「自律・自己統制性」の項目は、崎濱らの「自律性」「自己統制性」因子に含まれた項目の一部であったことを踏まえると、参加者が大学生だけではあったものの、本研究で得られた結果は崎濱らと概ね同じ方向を示していると言えよう。